

研究部だより

NO. 1

関ブロ千葉大会を終えて

○はじめに

昨年度、関ブロ千葉大会が開催され、各地区において研究の成果が発表されました。研究部として今後も研究の成果を踏まえ継続研究を行い、研究の内容を深化させたいと思います。

○昨年度の研究部の提案を振り返って

研究部では、生徒が将来、自分の手で夢や目標を実現させるため、問題解決に必要な学び方や学ぶ姿勢を生徒自身が学ぶことで、自分の力で問題を解決させたいと考えました（学びの自立）。その際のキーワードとして「問う力」と「自己調整力」をあげています。

○「問う力」とは

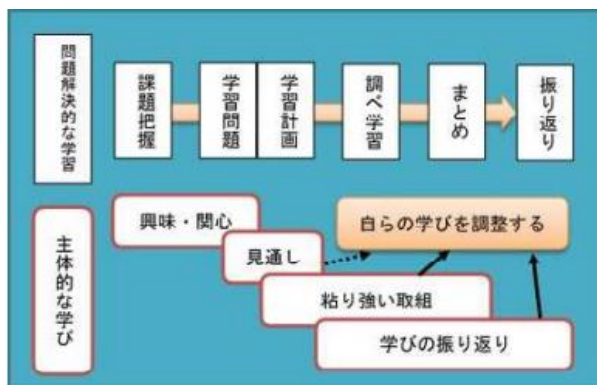
「問う力」とは課題を設定する力です。問題を解決するには、課題を見いだしより具体的に課題を設定することが必要です。「質問」や教師の「発問」から、自分で「問いを創る」ことができるよう「問う力」を育てることで、主体的の向上や連続性（一つ疑問が解決すると新たな疑問が生じる）による粘り強さが身につくこと等が期待できるなど、生涯学習に必要な資質・能力が身につきます。

○学びの自立を図るには 「個別最適な学び」と「自己調整」との関わり

今後、学びの自立を図るためには、学習者は自分に合った学び方を選択したり、計画を立てながら自分で学びを進める力が必要です（個別最適な学び）。そして、学び方が自分に合っていたか、計画が適切だったかを振り返り、次の学習に生かすなど、自分の学び方を調整する力（自己調整力）が必要となります。

○本教科との関わり

「自らの学習を調整しようとする」活動は「粘り強い取組を行う中で」実行します。その「粘り強い取組」は、問題解決的な学習での主体的な学びということになります。つまり、問題解決的な学習の過程の中で、主体的な学びをしていけば、子



供たちは自らの学びを調整するようになるということです。技術分野でいうものづくりによる問題解決的な学習で、ものづくりにおける計画の見直しなどにあたります。後者は、学習全体を振り返り、見直しや振り返りを通して今後の学習の改善に生かす場合です。

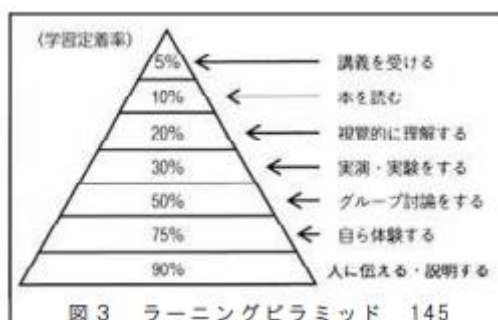
図の引用：日本文教出版 問題解決的な学習の中の「学びの調整」

<https://www.nichibun-g.co.jp/data/web-magazine/manabito/shakai/shakai007/>

○学習効果の上がる学び方とは

右の図は「ラーニングピラミッド」と言い、アメリカ国立訓練研究所が学習方法と学習定着率の関係をまとめたものです。

私は自分で勉強するときは主に本を読みながらアンダーラインを引くという方法ですが、定着度が非常に低いことがわかります。逆に本教科の特徴である「ものづくり」によって「為すことで学ぶ」ことは定着率が非常に高いことがわかります。



他に「人に伝える・説明する」では、内容をよく把握することが必要なので、学習効果も高いと考えられます。例えば学習内容をまとめる際に「小さな子にもわかるような文章で、イラストや色をつけて、簡潔に印象深くなるようにする」等にあたります。図3 引用：「自ら学びをコントロールする力を育む自己調整学習 友田信 明治図書」p145

他に「人に伝える・説明する」では、内容をよく把握することが必要なので、学習効果も高いと考えられます。例えば学習内容をまとめる際に「小さな子にもわかるような文章で、イラストや色をつけて、簡潔に印象深くなるようにする」等にあたります。図3 引用：「自ら学びをコントロールする力を育む自己調整学習 友田信 明治図書」p145

○おわりに

先日、文科省より学習指導要領の改訂に向けた論点を整理したものが出されました。その中で「自己調整」と「教師の指導性の在り方」が触れられています。今後、生徒が自分の力で問題を解決するための素養を身に付ける支援について考えたいです

引用：初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について

て 諮問のポイント：概要版

(令和6年12月25日中央教育審議会諮問)

*この文章は「授業のデザイン活用BOOK」を参考に書かれています

子供による学びの自己調整と教師の指導性の在り方

子供が自分自身で学びを調整し、教材や学習方法を選択できる学習環境デザインの重要性、新たな時代にふさわしい学びや教師の指導性の在り方をどう考えるか

子供たちにとって重要なこと

- 自らの人生を舵取りする力を身につけること
- 持続可能な社会の創り手となること
- 豊かな可能性を開花できること

文責 研究部（渡邊）